

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 18 日現在

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24616012

研究課題名(和文) ケア提供者のための死生学教育ツールの開発

研究課題名(英文) Developing a death education task for caregivers in Japan

研究代表者

下島 裕美 (Yumi, Shimojima)

杏林大学・保健学部・准教授

研究者番号：20306666

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：米国でケア提供者の死生学教育として実施されている五色カード法(Guided Death Experience)を実施した。ケア提供者、ケア提供者を目指す学生、中高年に実施した結果、(1)若者は時間的展望が変化するが中高年は変化しないこと、(2)「大切な人」のカードが最も捨てにくいこと、(3)ケア提供者は自分の感想を今後のケアに生かす発言があったが、学生は自分の感想にとどまるため、異なる年齢層の感想を提示して患者の視点の多様性への気づきを促す必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：We examined the effects on the participants of the five-cards task (Guided Death Experience), which is a death education task for caregivers in the U.S, in Japan. The results obtained among caregivers, students intending to become caregivers, and the elderly suggested the following: (1) Time perspective of the younger rather than that of the elderly participants altered as a result of the task. (2) The most difficult card to throw away was the "important person" card. (3) Caregivers wished to put their feelings to good account for future care; however, students focused only on their own feelings. We need to guide students to notice the diversity of patients' perspectives by showing the feelings of others.

研究分野：認知心理学

キーワード：死生学 時間的展望

1. 研究開始当初の背景

高齢化社会を迎えた現代日本のケア提供者教育においては、死を前提とした全人的ケア、死生観教育の充実が求められている。米国ではケア提供者用の多様なツールが開発され、教育に用いられているが、日本で同じ課題を実施する場合には文化の違いを考慮する必要があるであろう。そこで本研究では、米国のホスピスなどにおいてケア提供者を対象とした死生観教育として実施されている五色カード法 (Guided Death Experience: 五色のカードを4枚ずつ用意し、1枚のカードに1つずつ「大切なもの」「大切な人」「大切な場所」「大切な目標」「大切な経験」を記入する。そして「あなた」が悪性腫瘍で死にゆく物語を聞きながら、大切なものが記されたカードを投げることにより、死にゆく過程における喪失を疑似体験する) という課題を日本で実施し、文化差を考慮に入れた実施方法を検討する。

2. 研究の目的

本研究では、日本における終末期に対する意識の特性を考慮して米国で実施されている Guided Death Experience の実施方法を改良し、日本に適した「ケア提供者」を対象とした死生観教育ツールの開発を目指す。

(1) エンディングノートの内容分析による終末期に必要とされる意識の検討：現在日本で多数出版されているエンディングノートの内容分析を通じて、終末期に必要と考えられている項目を抽出する。

(2) 年齢による五色カード法の効果の比較：日本におけるケア提供者の年齢は比較的若いことが多く、ケアを受ける側の年齢は比較的高齢であることが多い。若者と高齢者では自身の死までの主観的時間距離が異なるため、五色カード法による効果が異なることが予想される。そこで大学生と高齢者を対象として五色カード法を実施し、五色カード法による時間的展望の変化の年齢差を検討する。

(3) 「ケア提供者」への死生観教育ツールとしての日本版五色カード法の検討：五色カード法を日本における学部教育および卒業後教育として実施するために、ケア提供者とケア提供者を目指す大学生を対象として五色カード法を実施しその効果を検討する。

(4) 五色カード法の新しい物語の作成と実施：高齢化社会の進行に伴い、日本では認知症を伴う終末期ケアが増加することが見込まれる。そこで日本人の終末期に対する意識の特徴を考慮した上で、認知症で死にゆく新たな物語を作成、実施し、その効果を検討する。

(5) 五色カード法実施による時間的展望の変化の実験的検討：五色カード法で自身の死を意識することにより人生の時間的展望に変化が生じるかどうかを実験的に検討するために、五色カード法前後にジンバルドー時間的展望質問紙を実施し、前後の得点を比較する。

3. 研究の方法

(1) 終末期に必要とされる意識の検討：インターネット書籍販売サイトで「エンディングノート」と検索し、自記入式で入手可能な37冊を分析対象とした。自記入部分の内容を2名が独立に内容分析を行った。

(2) 年齢による五色カード法の効果の比較：大学生30名、中高年11名を対象として五色カード法を試行し、感想を内容分析した。五色カード法前後に、過去の出来事3つ、現在の出来事3つ、未来の出来事3つを書き出し、重要なもの3つを選んで重要な順に並べてもらった。五色カード法前後での重要な出来事3つの順序の変化を検討した。

(3) 「ケア提供者」への死生観教育ツールとしての日本版五色カード法の検討：ケア提供者10名、ケア提供者を目指す大学生39名、高齢者8名を対象として五色カード法を実施した。課題後に、捨てるのが一番つらかったカード、捨てる時にどのように感じたか、自分で捨てるのではなく隣の人にカードを捨てられる時の気持ち、最後にカードを全部捨てた時の気持ちについて質問をした。

(4) 五色カード法の新しい物語の作成と実施：認知症を伴う終末期の事例を参考に認知症の五色カード法用物語を作成し、ケア提供者4名と一般人6名に実施して面接調査を行った。課題後に、捨てるのが一番つらかったカード、捨てる時にどのように感じたか、自分で捨てるのではなく隣の人にカードを捨てられる時の気持ち、最後にカードを全部捨てた時の気持ちについて質問をした。

(5) 五色カード法実施による時間的展望の変化の実験的検討：大学生29名を実験群、23名を統制群とした。実験群では五色カード法試行前後に日本版ジンバルドー時間的展望尺度(下島・佐藤・越智, 2012)を実施した。統制群では五色カード法の代わりに同時間の心理学の講義を実施した。講義前後に日本版ジンバルドー時間的展望尺度を実施した。

4. 研究成果

(1) 終末期に必要とされる意識の検討：抽出された項目は17項目であった。このうち30冊以上の書籍で該当した項目は「健康情報」「介護終末期」「財産」「遺言・相続」「葬儀」「私の情報(履歴や好きな物)」「思い出」「メ

ッセージ・感謝」「連絡先」であった。20冊以上において、「財産」「思い出」「連絡先」が内容の1割以上を占めていた。

事前指示書の目的や役割に照らすと、今回抽出された中で必要な項目は「健康情報」「介護終末期」「連絡先」のような「もしもの時」という未来を展望した情報であろう。しかし多くのエンディングノートにおいて「思い出」という過去の想起(自伝的記憶)の記入欄の占有率が高くなっていた。また、21冊には残されたペットの項目もあった。エンディングノートを記入することは、自分の人生の延長線上に必ず死があるという未来を展望することにつながる。いきなり事前指示書に取り組むことは難しいかもしれないが、残されたペットをどうするかという未来展望や自分の思い出の整理という自伝的記憶の再構成など身近な視点からエンディングノートに取り組むことで徐々に時間的展望を再構成し、最終的に自分の終末期を考えることにつなげることができるかもしれない。

(2)年齢による五色カード法の効果の比較：若者群で重要な3つの出来事の順番に変化があったのは22名、変化なしは7名、記入ミスが1名であった。中高年群の変化ありは2名、変化なしが6名、記入ミスが3名であった。若者は普段意識したことのない自分の死を意識することにより時間的展望が変化した一方で、中高年は若者に比べると過去を想起する機会や身近な人の死の経験が多いため、ライフストーリーが安定している可能性が示唆される。

(3)「ケア提供者」への死生観教育ツールとしての日本版五色カード法の検討：ケア提供者、ケア提供者を目指す学生、高齢者において、捨てるのが一番辛かったカードが「人」であったのはそれぞれ8名、30名、7名であった。「人」ではない場合も「親孝行」「家族と楽しく過ごす」など人と関連する内容であった。

ケア提供者も物語中の死を患者ではなく自分のものとして体験していたという報告から、五色カード法によりケア提供者も自身の死を意識する効果があることがわかった。また課題後の面接では、ケア提供者を目指す学生は自分がどう感じたかのみ言及していたが、高齢者は身近な人が亡くなったプロセスに、ケア提供者は自分が担当した患者さんに言及することが多かった。悪性腫瘍により病院で最後を迎える物語であったが、ケア提供者はほとんどが自分は別の形で最後を迎えたいと感じていた。ケア提供者を目指す学生には周囲への感謝と命の大切さに気付くという効果があった。ケア提供者にも同様の気づきがあるが、その先に自分のこれからの仕事に生かすという意識がみられた。また、大学生やケア提供者に高齢者の感想を紹介することにより、終末期における感じ方の多

様性への気づき、患者の視点を重視する必要性への気づきがみられた。

(4)五色カード法の新しい物語の作成と実施：捨てるのが一番つらかったカードはケア提供者4名全員が「人」であり、一般人では4名が「人」2名が「大切な体験」であった。認知症の物語では「知らない誰か(家族や職員)」がいつもそばにいてくれて迎える最期を幸せに感じる報告が多くみられた。

(5)五色カード法実施による時間的展望の変化の実験的検討：ジンバルド時間的展望尺度の5下位尺度(過去否定・過去肯定・現在快楽・現在運命・未来)の得点を従属変数とし、2(実験群・統制群)×2(五色カード前・後)の分散分析を行ったところ、実験群において五色カード後は前よりも有意に現在快楽得点が高かった。五色カード法で死という自分の未来を意識することにより、大学生の時間的展望に変化が生じることが示された。

以上より、米国でケア提供者を対象として実施されている五色カード法は、日本でもほぼ同様の手続きで実施可能であることがわかった。更に、ケア提供者を目指す学生の教育においても効果があることが示された。また同じ課題を体験した他者(特に高齢者)の感想にふれることにより、終末期の感じ方の多様性と患者目線のケアの重要性に気づく可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

下島裕美、自己と他者の終末期エピソードへの意識が時間的展望に与える影響、杏林大学研究報告教養部門、査読無、33巻、2016、41-48.

下島裕美、終末期に向けた思考整理ツールとしてのエンディングノート、杏林大学研究報告教養部門、査読無、32巻、2015、1-7.

下島裕美、死という未来を展望するために必要なものは何か - 自伝的記憶とエンディングノート -、杏林大学研究報告教養部門、査読無、31巻、2014、53-58.

[学会発表](計4件)

下島裕美・石川智、死にゆく過程の疑似体験と時間的展望の変化 - 五色カード法とZimbardo Time Perspective Inventoryを用いて -、日本心理学会第79回大会、名古屋国際会議場、2015.9.22.

下島裕美・石川智・島田正亮、時間的展望から死について考える、日本発達心理学会第

26 回大会、東京大学本郷キャンパス、
2015.3.20.

下島裕美、エンディングノートの記入項目
と時間的展望、日本パーソナリティ心理学会
第 23 回大会、山梨大学、2014.10.5.

下島裕美、日本版 Transcendental-Future
Time Perspective Scale 因子構造の検討、日
本パーソナリティ心理学会第 22 回大会、189、
江戸川大学、2013.10.12.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下島 裕美 (SHIMOJIMA, Yumi)
杏林大学・保健学部・准教授
研究者番号：2 0 3 0 6 6 6 6

(2) 研究分担者

蒲生 忍 (GAMOU, Shinobu)
杏林大学・保健学部・教授
研究者番号：9 0 1 2 2 3 0 8

島田 正亮 (SHIMADA, Masaaki)
杏林大学・医学部・助教
研究者番号：8 0 5 8 0 5 6 3

石川 聡 (ISHIKAWA, Satoru)
杏林大学・医学部・助教
研究者番号：7 0 5 8 0 5 6 2